悔い改めと無限の赦し

ルカ福音書17:1-4

17:1 イエスは弟子たちにこう言われた。「つまずきが起こるのは避けられない。だが、つまずきを起こさせる者はわざわいだ。

17:2 この小さい者たちのひとりに、つまずきを与えるようであったら、そんな者は石臼(いしうす)を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。

17:3 気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。

17:4 かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」

【祈りながら考えよう】

（１）「つまずき」とはどういう意味ですか。

（２）「小さい者たちにつまずきを与える」よりは「海に投げ込まれるほうがまし」なのはなぜですか。

（３）マタイ福音書18章22節によれば、罪の赦しは何回までですか。

【解　説】

（１）「つまずき」とはどういう意味か

イエスは弟子たちにこう言われた。「つまずきが起こるのは避けられない。だが、つまずきを起こさせる者はわざわいだ。（1節）

「つまずき」という言葉は、原語のギリシャ語スカンダロンで、「罪に誘惑するもの」「人の歩みの障害となるもの」という意味で、英語の「スキャンダル」という言葉の語源である。

人が神に近づこうとするのを妨げる。主イエスは、弟子たちに、「つまずきが起こるのは避けられない」と言われた。人がつまずきを与えることもあれば、悪魔や悪霊によってつまずくこともある。

（２）つまずきを与える者は、海に投げ込まれたほうがましである

だが、つまずきを起こさせる者はわざわいだ。この小さい者たちのひとりに、つまずきを与えるようであったら、そんな者は石臼(いしうす)を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。

《この小さい者たち》と語られたのは、そこにいる弟子たちのこと。迷いやすい、よろめきやすい、その弱い者のひとりをつまずかせるならば、《**そんな者は石臼(いしうす)を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです**》。

石臼(いしうす)を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれる。これは当時のローマ帝国の死刑の仕方であった。その方が「まし」であると言われる。なぜ「まし」なのか。

小さい者のひとりを、主に従って来ているその小さい者を、つまずかせるなら、その信仰を妨げるなら、それはゲヘナの火の中に投げられ、永遠にゲヘナの苦しみを苦しまなければならない。

殺人は人間の体を殺す。しかし信仰を妨げ、信仰を損なうことは、魂を損なう出来事である。体の殺しと比べものにならない。体は殺されても、その魂が救われれば、その魂は永遠に幸せである。

キリストを信じて、永遠の救いを受けようとしている者をつまずかせるならば、永遠の命を奪ってしまうことである。単なる一時的なこの世だけの体の命を奪うだけではない。

この世においては、人を殺すとか、盗むとか、姦淫するとか、こういった罪を重大な罪だと考える。キリスト信仰を妨げたりすることは大した罪と思わない。しかし、神様の前には、キリスト信仰につまずきを与えること、これ以上にわざわいな罪の出来事はない。

（３）どのように戒めるべきか

気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。（3節）

戒める目的は、仕返しをするためでも相手に恥をかかせるためでもなく、その人を主との、そして兄弟姉妹たちとの交わりへ回復させるためである。すべての戒めは愛の心をもってなされるべきである。

もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなければならない（3節）。愛、受け入れ、赦し、これが聖書の教えである。。マタイ福音書18章の後半にはどのように対応すべきか、具体的に詳しく語られている。

また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。

もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。

それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人か取税人のように扱いなさい。まことに、あなたがたに告げます。何でもあなたがたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたがたが地上で解くなら、それは天においても解かれているのです。（マタイ18:15-18）

まず、自分ひとりで相手のところへ行き、ふたりだけのところで、戒めなければならない。もし彼が《悔い改めれば》、彼を赦したことを伝えるべきである。個人的に戒めても効果がない場合は、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行く。複数で忠告する。それでも言うことを聞かないなら、どうすべきか。

（４）柔和と厳しさをもって

それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。

その問題を教会に提出すべきである。教会全体がそれを改めなさいと、忠告する。それでもなお、正しい信仰の道に帰ることができなかったらどうするのか。

教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人か取税人のように扱いなさい。

「異邦人か取税人のように」というのは、これは律法を守るユダヤ人の言い方。教会では、「未信者として」扱うということである。あなたはまだ信仰にある私たちの仲間ではない、教会の一員ではないと、除名される結果となる。

（５）悔い改めと無限の赦し

もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。（3節）

もし、自分は間違っていたと認め、悔い改めるなら、喜んで、これを赦す。

かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。（4節）

７という数はユダヤ人においては完全数である。だから七度といえば、それこそ限度のないことを意味する。１日に何回でもということである。七度というのだから七度までは赦すが、もう八度目だからだめだ、という意味か。文字どおりとれば、そう読めないこともないが、マタイ福音書18章を読むならそういう意味ではない。

そのとき、ペテロがみもとに来て言った。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何度まで赦すべきでしょうか。七度までしょうか。」イエスは言われた。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。（マタイ18:21-22）

七度に、さらに完全数七の十倍、これはもう限りがないことを言っておられる。赦すことに、悔い改めることに限度はないということである。

神様と私たち罪人の関係では、神様は私たちを無限に赦していて下さるということである。イエス・キリストの十字架の贖いにおいて、すでに私たちの罪は、完全に私たちの前から取り除かれてしまっている。

だから、私たちが自分の罪に気づいて、その罪を悔い改めていくならば、「…**私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます**」（Ｉヨハネ1:9）。

神様は何度でも赦して下さる。その赦しに限度はない。悔い改める悔い改めにも限度がない。